

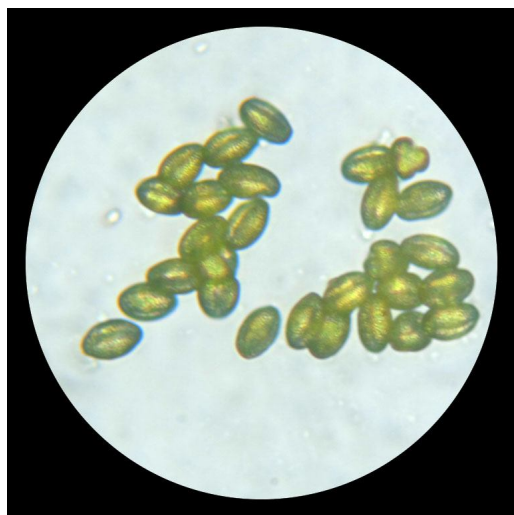
「キンモクセイの二度咲き現象 (3)」

お茶の水女子大学附属小学校 田中 千尋

(7) 二度目も花の勢いがなかったキンモクセイ



写真は二度目に咲いたキンモクセイだ。一回目よりも花がたくさんついているので、どうやら二度目が「本命」のようだ。しかし、例年の枝が見えないほどたくさん咲く「一回咲き」に比べると、明らかに咲き方に勢いが無い。しかし、花粉は池袋まで運ばれたかもしれない。キンモクセイは香りからも明らかに虫媒花だが、花粉は風媒花なみに小さいのだ。



「キンモクセイの花粉」 ×400 約0.03mm

(8) 「二度咲き」を研究した和歌山大学の論文

年によってキンモクセイが二度咲きする現象は、園芸好きの方々には、広く認識されているようだ。しかし、専門的な論文は少なく、あまり研究されていない分野のようだ。

そんな中でも、「夏季から秋季にかけての気温がキンモクセイの開花に及ぼす影響」(和歌山大学 2012)

という論文に、詳しい研究が掲載されているとわかった。まだ全文は読んでいないのだが、その抄録にはこのように書かれている。

本研究では、キンモクセイの2度咲き現象が近年の温暖化、高温化の影響である可能性を検討する目的で、花芽分化期の夏季から開花期の秋季にかけて野外の気温に対して3℃加温したグロースチャンパー内で育成する実験をおこなった。その結果、加温処理によって開花の開始は遅れ、開花期は長期化した。また、花ごとの開花日数は、開花期の後期に開花した花で短縮化された。さらに、加温によって開花期に複数回のピークのある2~3度咲き現象が引き起こされた。この2~3度咲き現象には、1)集団内での個体ごとの開花時期のばらつきによる見た目の上での2~3度咲き、2)同一個体内での枝、花芽の着生部ごとの開花時期のばらつきによる見た目の上での2~3度咲き、3)同一箇所の花芽の着生部に複数の花芽が形成され、それらが段階的に開花する2~3度咲き、4)それらが複合された2~3度咲きの4パターンあることが分かった。

これによると、「二度咲き」の原因は、気温の急激な変化(実験では「加温」)が大きいことがわかる。また、一つの個体(株)の開花時期のズレによる「見た目」の影響が大きいように読み取れる。また「二度咲き」にとどまらず、「三度以上」咲く現象もあると書かれている。しかし、「見た目の開花のズレ」が原因とすると、今年のように、明らかに一度散ったあと、しばらくしてもう一度満開になるという、「怪現象」の説明できないような気がする。

(9) 雄株と雌株が会話をしているとしたら？

仮に、キンモクセイの雌株と雄株が、何らかの方法で「会話」をしているとしたらどうだろう？ある時期に、雌花の開花が悪い年があったとする。たとえば今年のように、雨が続いてその時期に雌花を咲かせても、受粉が困難な状況だ。その場合、雄株は花芽の成長を一旦停止させる。雌花が咲いた頃、もう一度開花させているのではないだろうか？キンモクセイは「花芽」を成長させるのが、他の植物よりも速いというのも、この説なら説明できる、この説を実証するのは難しいが、研究の価値はありそうだ。